

〔論 文〕

韓国初等学校における『2015改訂教育課程』と教科書の特徴

—統合教科書と『安全な生活』を中心に—

한국 초등학교에 있어서의 『2015년 개정교육과정』과 교과서의 특징
-통합교과서와 『안전한 생활』을 중심으로-

Characteristics of the 2015 Revised National Curriculum and Textbooks for Elementary Schools
in South Korea: Focusing on Integrated Subjects and *Safe Life*

朴 貞蘭
PARK Jeongran

1. はじめに

戦後韓国における教育課程は、1954年から10回にわたり開発・改訂が行われてきた¹。現行の教科書は、2009年に改訂された教育課程に基づいたものが大半であるが、2017年度・初等学校²1・2学年用の一部の教科書には、『2015改訂教育課程』を適用させたものもある。

2015年12月、韓国の教育部は、「初・中等教育法」（第23条第2項）に依拠し、初・中等学校の教育課程（教育部告示第2015-74号、2015年9月23日）の総論やその適用時期を告示したが、この『2015改訂教育課程』（教育部告示第2015-80号、2015年12月1日）は、2017年から2020年にわたり、初等学校から高等学校まで適用していく予定である。

『2015改訂教育課程』は、とりわけ「創意的な体験活動」（「教科（群）」の他、「創意的な体験活動」を新たに設定）を重視した「体験学習」に関する項目が目立っている。たとえば、初等学校（1～2学年の場合）では、ハングル教育を強調するなど幼児教育課程（「ヌリ課程」）との連携を強化していく上で、授業時数を週に1時間ずつ増加させたものの学生に学習負担をかけないようにするため、「創意的な体験活動」時間を活用させるとした。また、初等学校1～2年生における「正しい生活」、「賢い生活」、「楽

¹ 戦後初めて開発された韓国の第1次教育課程（朝鮮戦争のため、予定より遅れて1955年に発行）は、「教育課程」ではなく『第1次教科課程』であった。第2次以降は、『第2次教育課程』、『第3次教育課程』、『第4次教育課程』、『第5次教育課程』、『第6次教育課程』、『第7次教育課程』、『2007改訂教育課程』、『2009改訂教育課程』、『2015改訂教育課程』となり、合計10回にわたり開発・改訂が行われてきた。

² 韓国の「初等学校」は、日本の小学校に該当する教育機関であるが、本稿では、小学校と訳さずそのまま「初等学校」とする。なお、本稿で参考文献として引用している韓国語による書籍や論文、報告書、報道資料、新聞記事などの文献は、すべて筆者が翻訳した。

しい生活」教科は、教育部が設定した6つの核心力量を取り上げ、「実践活動」、「探求活動」、「表現・遊び活動」を中心とした「体験学習」ができるようにした。なお、「正しい生活」、「賢い生活」、「楽しい生活」の活動は、初等学校の統合教科書において活かされ、それぞれの能力や技能を身につける教育につながっていく。これらの「体験学習」は、一般の教科とは別に2年間に336時間を使用し、「創意的な体験活動」を行うようになっているが、さらに体験中心の『安全な生活』（64時間）という科目も新設することで、初等学校における「体験学習」活動を増加させた。

『安全な生活』は、「生活安全／交通安全／身辺安全／災難安全」の4つの領域で設定されているが、初等学校の低学年から体系的な安全教育を実施させ、安全意識を内面化させるという狙いがみられる。また、初等学校3年生から高等学校までの関連教科（体育、技術・家庭（実科）、科学、保健など）に、「安全」という単元を新設し、理論と実践・体験を体系的に取り上げ、これを通じて究極的に安全が生活化できるように構成するなど、教科書における「創意的な体験活動」の主な内容が「安全な生活」に合わせていることがわかる。

以上の点を踏まえて本稿では、2017年3月から適用されている初等学校1・2学年の『2015改訂教育課程』を検討した後、初等学校の統合教科書や『安全な生活』を取り上げ、その特徴を明らかにしていきたい。

2. 『2015改訂教育課程』と新しい教科書の特徴—初等学校1～2年生用を中心に

2015年12月、韓国の教育部は、「初・中等教育法」（第23条第2項）に依拠し、初・中等学校の教育課程（教育部告示第2015-74号、2015年9月23日）の総論やその適用時期を告示したが、この『2015改訂教育課程』（教育部告示第2015-80号、2015年12月1日）は、【表1】のように、2017年から2020年にわたり、初等学校から高等学校まで適用していく予定である。

【表1】『2015年改訂教育課程』の教科書の適用時期

適用年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
初等学校	1・2年生	3・4年生	5・6年生	—
中学校	—	1年生	2年生	3年生
高等学校	—	1年生	2年生	3年生

【出典】筆者作成。

【表2】「正しい生活」、「賢い生活」、「楽しい生活」の目標と核心力量・活動

教科	目標／核心力量（核心能力）	活動
正しい生活	基本的な生活習慣と学習習慣の形成	実践活動中心：振り返り、自ら行動する、内面化する、関係づくり、習慣化する
	共同体意識、自己管理能力、コミュニケーション力	
賢い生活	周りに対する関心と理解を図るために	探求活動中心：観察する、グループ作り、調査する、予想する、ネットワーク作り
	創意的思考力、知識情報処理能力、コミュニケーション力	
楽しい生活	創意的な表現力を身につけた健康な人になるために	表現・遊び活動中心：遊ぶ、表現する、鑑賞する
	深美的感性力、創意的思考力、コミュニケーション力	

出典：教育部告示第2015－74号〔別冊15〕³を参考に筆者が作成。

『2015改訂教育課程』は、学校教育を通してすべての学生が人文・社会・科学技術に関する基礎を身につけ、人文学的な想像力と科学技術の創造力を備えた創意融合型の人材養成を目指している。開発方向に従い、未来社会で求められる核心力量の反映がもっとも重要な内容であると言える。「核心力量」とは社会共同体の構成員としての役割を履行するために、学習者に求められる知識、技能、態度を総体的に示す用語で、すべての学習者が身につける基本的かつ必修的な能力である。具体的には、総論において6つの「核心力量」として、自己管理能力、共同体意識、コミュニケーション力、創意融合思考力、知識情報処理能力、深美的感性力を提示している。また、『2015改訂教育課程』では、従来の「正しい生活」、「賢い生活」、「楽しい生活」教科にも教育部が設定した6つの核心力量を取り入れたが、【表2】のように、初等学校1～2年生からそれぞれの活動を通して核心力量（能力）が身につけられるように再構成した。

本章では、とりわけ初等学校の教育課程を取り上げ、『2015改訂教育課程』に基づき開発された初等学校1～2年生用の教科書の特徴について検討する。

2－1. 初等学校1～2年生用教科書の特徴

『2015改訂教育課程』を基本とする新しい教科書は、2015年10月から執筆され始めたが、「創意融合型人材」の養成のため、体系的な開発の手続きを守りながら、学校現場における様々な意見も取り入れるなどの過程を経て完成した。

³ 各教育課程については、韓国の教育部のホームページに公開されている。

<http://www.moe.go.kr/boardCnts/list.do?boardID=312&m=030101&s=moe>

研究対象学校、教師研究会が参加した「現場適合性の検討」⁴を通して、多様な現場の意見を取り入れ、専門家による内容検討、「国立国語院による表記・表現の監修」⁵など、体系的な開発手続きを通して質的な向上を図った。また、新しい教科書が現場で活用できるように、市・道教育庁と協力しながら、1～2年生の担任予定の教師を対象とした「新教科書の効果的な活用方法に関する研修」⁶を実施している。こうした過程を経て、2017年3月、初等学校1～2年生は『2015改訂教育課程』に基づき開発された新しい教科書で授業を受けることとなる⁷。

新しい教科書は、学習量を減らし学生の参加活動を増やすなど、学生がより容易く勉強できるように構成されている。学生が学習する内容を以前の教科書の80%レベルまで調整し、1年生用教科書の場合、以前より合計270頁以上が減らされるなど、内容も分量もコンパクトなものに仕上がった。また、初等学校の低学年レベルに合った言葉の使用、基礎・基本学習レベルの内容構成、遊び中心の学習活動の提示など、低学年の学生に合わせた楽しい教科書を目指して開発されていることがわかる⁸。それでは、新しい教科書開発の特徴をまとめてみよう⁹。

2-1-1. 『国語』：ハングル教育、教科書で徹底するように。

初等学校の新入生が学校で体系的なハングル教育を受けられるように、ハングル教育を既存の27時間から60時間に増やし、二重バッチムのような難しい内容は2年生まで学習できるようにするなど、すべての学生が読み書きの基礎能力を身につけるようにした。また、ハングルを機械的に暗記する代わりに、ゲームしながら楽しく学べる活動中心の内容として構成し、指導書に様々なレベルの資料を掲載するなど、学生に合わせた授業が可能となった。とりわけ、1年生の1学期には、数学などすべての教科書において文字の露出を最少化した上、聞くこと・話すことを中心に構成し、ハングルがわからなくても授業が受けられるようにしたことが大きな特徴である。

⁴ 研究対象学校10校、教師研究会34団体（608名）、専門家40名が参加。ジュ・ジョンフン、教育部の報道資料「新しくなった1～2年生用の教科書についてお答えします」教育部ホームページ、2017年2月20日付、4頁。

⁵ 表記・表現及び正確な用語使用のための監修を実施。前掲の報道資料、教育部ホームページ、2017年2月20日付、4頁。

⁶ 市・道の教育庁の核心教員研修（2016年12月）及び市・道の教育庁別の担当教師研修（2017年1～2月）を実施した。前掲の報道資料、教育部ホームページ、2017年2月20日付、4頁。

⁷ 初等学校の教科書開発の流れ：教科書開発のための計画作り→編纂機関の公募／選定→教科用図書編纂審議会の構成・運営（現場での検討本の監修→現場での適合性の検討（研究対象学校、教師研究会、専門家）→表記・表現の監修）→決済本の承認→発行（現場に配布）。前掲の報道資料、教育部ホームページ、2017年2月20日付、4頁。

⁸ 前掲の報道資料を参考に筆者がまとめた。教育部ホームページ、2017年2月20日付、1～2頁。

⁹ 前掲の報道資料、教育部ホームページ、2017年2月20日付、2頁。

【表3】初等学校1～2年生使用の新しい教科書

区 分		国 語	数 学	正しい生活／賢い生活／楽しい生活	創意的体験活動
1学期	1年生	『国語』 1－1 ガ・ナ 『国語活動』 1－1	『数学』 1－1 『数学学び』 1－1	『春』 1－1 『夏』 1－1	『安全な生活』 1
	2年生	『国語』 2－1 ガ・ナ 『国語活動』 2－1	『数学』 2－1 『数学学び』 2－1	『春』 2－1 『夏』 2－1	『安全な生活』 2
2学期	1年生	『国語』 1－2 ガ・ナ 『国語活動』 1－2	『数学』 1－2 『数学学び』 1－2	『秋』 1－2 『冬』 1－2	『安全な生活』 1
	2年生	『国語』 2－2 ガ・ナ 『国語活動』 2－2	『数学』 2－2 『数学学び』 2－2	『秋』 2－2 『冬』 2－2	『安全な生活』 2

【出典】1学期の教科書は、2017年3月1日初版発行のもので、2学期の教科書は、2017年8月15日初版発行のものである。筆者作成。

2－1－2. 『数学』：基本に充実な数学、ゲーム学習として楽しく。

数と基礎演算の原理が探求できる基本内容を強化し、問題を容易く設定するなど¹⁰、これまでに初等学校における数学の難点として指摘を受けたストーリーテリングの比重を大幅に縮小した¹¹。その上、親近感がわくように同世代の学生を教科書に登場させ、「数学は私の友達」、「遊び数学」などの「遊び活動」を中心として構成し、数学を楽しく学習できるようにした。一方、単元の執筆意図に関する執筆者の説明と数学の問題解説の動画を提供することで¹²、優しい数学教科書を目指した。

¹⁰ 初等学校1～2年生の1630名を対象に『数学学び』の項目に対する検証を実施（平均正答率77.1％）。前掲の報道資料、教育部ホームページ、2017年2月20日付、3頁。

¹¹ 単元別の導入部分の頁数基準が既存の教科書の15.7％だったのが、新しい教科書では7.3％に。前掲の報道資料、教育部ホームページ、2017年2月20日付、3頁。

¹² Askmathホームページ（www.askmath.re.kr）。2017年2月からサービス開始。前掲の報道資料、教育部ホームページ、2017年2月20日付、3頁。

2-1-3. 『正しい生活』、『賢い生活』、『楽しい生活』：主題中心授業で、四季をずっと楽しめるように。

「学校」、「春」、「家族」、「夏」、「町」、「秋」、「国」、「冬」という8つの主題を中心に統合し、学習できるように構成した。また、教師と学生が一緒に作っていく授業ができるように、指導書に様々な活動資料を掲載するなど、学生自らが積極的に授業に参加できるように開発した。

2-1-3-1. 『正しい生活』

・特徴：「正しい生活」科は、日常生活と学習に必要な基本的な習慣を形成し、実践できる能力と態度を育て、健全な人性を持つ人として成長できる教科である。「正しい生活」科では、共同体意識、自己管理能力、コミュニケーション力が教科の重要なポイントである。また、上記の能力の他、「振り返ってみる」、「自ら行動する」、「内面化する」、「関係作り」、「習慣化する」などの「体験活動」を通して、実践技能を身につけることが重視されている。このため、「学校」、「春」、「家族」、「夏」、「町」、「秋」、「国」、「冬」の8つの領域（上位主題）で内容を選定し、「賢い生活」科と「楽しい生活」科との統合も考慮した。

・目標：日常生活に必要な基本生活習慣と学習習慣を身につけ、共同体の構成員としての基本素養と人格を備えた「正しい人」として成長する。

- ① 家庭、学校、社会で生活するのに必要な基本生活の習慣と学習に必要な基本学習習慣を育てる。
- ② 正しい生活を実践する過程において、価値と態度を内面化し、様々な実践能力を学習する。
- ③ 共に生きるのに必要な共同体意識を涵養し、自己管理能力とコミュニケーション力を育てる。

2-1-3-2. 『賢い生活』

・特徴：「賢い生活」科は、自身が生活している地域・世界に関心を持ち、社会と自然の様々な姿と関係・変化などに対して、積極的に探究し合理的に思考・行動する人を養成する教科である。「賢い生活」科では、創意的思考能力、知識情報処理能力、コミュニケーション力が教科書の重要なポイントである。また、「観察する」、「グループ作り」、「調査する」、「予想する」、「ネットワーク作り」などの「体験活動」を通して、探求技能を身につけることが重視されている。このため、「学校」、「春」、「家族」、「夏」、「町」、「秋」、「国」、「冬」の8つの領域（上位主題）で内容を選定し、「正しい生活」科と「楽しい生活」科との統合も考慮した。

・目標：地域・世界に関心を持ち探求しつつ、社会現象と自然現象に対する理解を深める。

- ① 地域の人々の生活や自然の姿、社会現象の相互関係と変化に関心を持ち探求する。
- ② 地域を対象に探求活動を随行するのに必要な基礎的な探求能力を学習する。
- ③ 地域で起きる現象を創意融合的に考え、資料を収集・分類・理解・探求する過程において他の人とコミュニケーションをする。

2-1-3-3. 『楽しい生活』

・特徴：「楽しい生活」科は、日常生活に必要な基礎的な能力を身につけ、美しさに関する経験と身体表現活動を通して、文化的な素養を持つ人を育てる教科である。「楽しい生活」科では、審美的な感性力、創意的な思考力、コミュニケーション力が教科の重要なポイントである。また、「遊び」、「表現する」、「鑑賞する」技能を学習することに重点をおいた。このため、「学校」、「春」、「家族」、「夏」、「町」、「秋」、「国」、「冬」の8つの領域（上位主題）で内容を選定し、「正しい生活」科と「賢い生活」科との統合も考慮した。

・目標：健康な身体と創意的な表現能力を育て、日常生活を楽しく営為し文化的な素養を涵養する。

- ① 色んな遊びと表現活動を通して、感覚を発達させ健康な身体を育てる。
- ② 活動に参加する過程で基礎的な表現技能を学習する。
- ③ 音（声）、イメージ、動きなどに対する審美的な感性能力を育て、創意融合的に表現しながら、総合のコミュニケーション力を育てる。

以上、新しく開発された初等学校（1～2年生）用の教科書の特徴について述べた。次章では、初等学校教科書の中でも、『2015改訂教育課程』のキーワードの1つであるとも言える「統合」教科書（2017年発行）について検討する。

3. 初等学校用の統合教科書—『春』、『夏』、『秋』、『冬』（1～2年生用）

韓国の教育界に「統合」という用語が登場したのは、第4次教育課程（1981年～1987年）からである。この時期の教育課程には「統合教科」という用語が公式的に登場していないが、初等学校1～2年生では、いくつかの科目をまとめた「統合教科書」が開発され・使用された¹³。この第4次教育課程の時期に、初等学校1～2年生を対象とした統合教科書が登場したのは、一大事件であったという。「統合」という用語にも慣れていなかった当時としては、教育課程上、教科8科目をまとめて、3科目にすることはもっとも実験的な発想であったためである¹⁴。第5次教育課程（1987年～1992年）からは、公式的に統合教育課程という用語が登場するが、初等学校1～2年生において統合教育課程が開発され、この教育課程の内容に基づいた統合教科書も開発され使用されるようになった。以後、「統合」という用語は、教育課程はもちろんのこと、教授・学習においても積極的に取り入れられる概念として位置づけられるようになる。

統合教科書のポイントは、「主題中心」の統合学習にある。『2009改訂教育課程』の

¹³ 初等学校1～2年生用の『바른 생활（正しい生活）』（『国語』、『道徳』、『社会』を統合）、『즐거로운 생활（賢い生活）』（『数学』（当時の『算数』）、『科学』（当時の『自然』）、『社会』の地理部分を統合）、『즐거운 생활（楽しい生活）』（『美術』、『音楽』、『体育』を統合）の3科目として統合した。

¹⁴ ジョ・サンヨン「2015改訂教育課程による統合教科書の開発方向」『統合教育課程研究9』2015年、135～159頁。

統合教科書から、教師と学生がともに授業を計画するという統合授業設計の経験、そして学生が中心となる学びが生まれる授業の形態を図ったものである。

本章では、統合教科書の構成や具体的な事例を取り上げて分析していきたい。

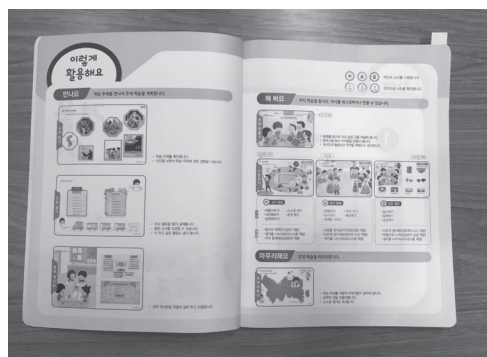
3-1. 統合教科書の構成

2009改訂における統合教科は、「上位主題」を教科書名として掲げるようにした。すなわち、教科書の教科の区分を無くし、主題を中心に「正しい生活」、「賢い生活」、「楽しい生活」の3つの教科を統合・構成したものである。これによって、2007改訂期までに存在した「教科中心—主題連携」方式が「主題中心—教科連携」方式へ変化し、新しい教科書を開発することとなる。

「上位主題」の8つは、主題教科書のタイトルとなっており、1つの主題教科書には、1年生・2年生のそれぞれに2つの単元が配置された。すなわち、教育課程の「上位主題」は、4つの「下位主題」で構成され、4つの「下位主題」中2つは1年生に、残りの2つは2年生に配置される形で開発された。教科書の単元構成は、「上位主題」は教科書のタイトルに、「下位主題」は単元名、各教科別に設定されている活動主題は、学校・クラス（学生）によって設定するようにした。

2017年発行の統合教科書は、『2015改訂教育課程』に基づき学期別に2巻として構成され、指導書は学期別1巻として構成された。教育課程にあった主題中、空間主題と季節主題を分け、季節主題を教科書のタイトルにしたのである。

統合教科書の単元は、以下のように3項目として構成されている。



【写真1】統合教科書『冬1-2』の構成

「このように活動しましょう。」2～3頁。

- 1) 「主題に出会う」（写真を読む／単元を読む／勉強の掲示版作り。童話読みは、CDに収録）
- 2) 「主題を学習する」（授業作り）
- 3) 「主題学習をまとめる」

1) 「主題に出会う」では、学習主題を確認し、主題学習を計画する。2) 「主題を学習す

る」では、単元別に主題と関連のある話を読み、教師と学生が共に授業を作っていく。特徴としては、学習目標や学習活動も具体的に提示されておらず、各クラス的环境、学生の関心・興味を反映した活動をそれぞれに計画し、実行するようにしているところだ。学生の意見を積極的に取り入れ、学生自らが学習目標を設定し、学習活動を作っていく構成になっている。3) 「主題学習をまとめる」では、単元をまとめる。提示されたいくつかの活動中一つを選択して、現在までの学習内容を振り返ってみる。

それでは、「上位主題」を中心に作られた統合教科書を紹介していきたい。【表4】は、『2009改訂教育課程』における初等学校1～2年生用の統合教科書16種（2013年度～

2016年度使用）であるが、本稿では、『2015改訂教育課程』に基づいた初等学校の統合教科書（2017年度から使用、【表5】）を取り上げる。

【表4】『2009改訂教育課程』統合教科書（2013年度～2016年度適用）

学年	教科書名（1～2学期）
1年生	『学校1』、『春1』、『家族1』、『夏1』、『隣人1』、『秋1』、『わが国1』、『冬1』
2年生	『私2』、『春2』、『家族2』、『夏2』、『隣人2』、『秋2』、『わが国2』、『冬2』

【出典】筆者作成。

【表5】『2015改訂教育課程』統合教科書（2017年度から適用）

学年	教科書名・1学期	教科書名・2学期
1年生	『春1-1』、『夏1-1』	『秋1-2』、『冬1-2』
2年生	『春2-1』、『夏2-1』	『秋2-2』、『冬2-2』

【出典】筆者作成。

3-2. 統合教科書の内容—『冬1-2』を事例に

【表5】にあるように、統合教科書は、1・2年生の1学期用として『春1-1』、『夏1-1』、『春2-1』、『夏2-1』が、2学期用として『秋1-2』、『冬1-2』、『秋2-2』、『冬2-2』が開発された。



【写真2】2017年度使用の統合教科書4種8巻。

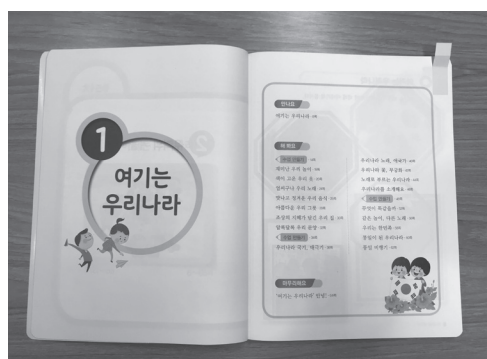
9種だった「上位主題」が8種に変更された。統合教科書の編纂は、教員養成の専門大学である「韓国教員大学校・主題別教科書初等統合編纂委員会」で、表記及び表現などに関する監修は、「国立国会院・語文規範」で行い、国定教科書であるため著作権は教育部が持つ。発行と印刷は、長年にわたり教科書開発に関わってきた株式会社教学社が担当し、1学期の教科

書は2017年3月1日に、2学期の教科書は2017年8月15日に初版が発行された。

2017年度統合教科書は、既存の9種の16巻で構成から、『学校』、『私』、『家族』、『わが国』、『隣人』が除外され、『春』、『夏』、『秋』、『冬』という4種8巻の構

成となった。内容には大きな変化はなく、構成上の変化があった。このように、1～2年生用の主題別統合教科書を現行の16種から8種に減らしたのは、「教科書が多くて使用しにくいという教育現場の意見を反映」したことであった¹⁵。また、統合教科書の教育の他、「創意的な体験活動」として『安全な生活』という教科が新設されたが、体験中心の科目で、「交通安全／生活安全／災難安全／身近安全」の4つの領域という構成となった。このため、1～2年生の一週間の授業時数が1時間増えることとなる。

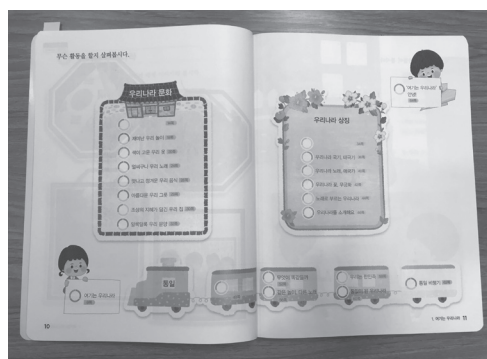
それでは、『冬1-2』を事例に統合教科書の内容を確認してみよう。『冬1-2』には、「国」と「冬」という2つの「上位主題」が取り上げられているが、ここでは「国」という「上位主題」と「わが国」という「下位主題」に注目していきたい。



【写真3】「ここはわが国」6～7頁。

- ・「会いましょう」14～33頁。
→「ここはわが国」
- ・「やってみましょう」34～63頁。
→「授業作り」①「わが国の文化」項目
→「授業作り」②「わが国の象徴」項目
→「授業作り」③「統一」に関する項目
- ・「まとめましょう」64頁。
→「「ここはわが国」こんにちは！」

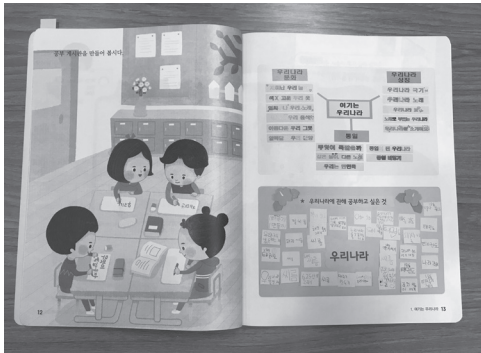
「会いましょう」という活動は、すべての統合教科書に設定されている活動項目である。「会いましょう」では、「写真を読む」、「単元を読む」、「勉強掲示板」を通して、学習主題を見つけ主題学習の計画を立てる活動をする。ここでは、「予想する」、「考えを分かち合う」（話し合う・議論する）能力も身につける。



【写真4】「どのような活動をするかを考えてみましょう。」10～11頁。

- ・「わが国の文化」、「わが国の象徴」に関する項目
- ・「授業作り」①～③までの主題がここで確認でき、授業の全体像がイメージできる。また、正しい生活／賢い生活／楽しい生活のそれぞれの活動時間（授業時数）が、色別に区別されており、「創意的な体験活動」ができる。

¹⁵ イ・ジョンウ「初等1・2年生の統合教科書を8種に縮小」『世界日報』2015年9月25日付。



【写真5】「勉強掲示板を作ってみましょう。」
12～13頁。

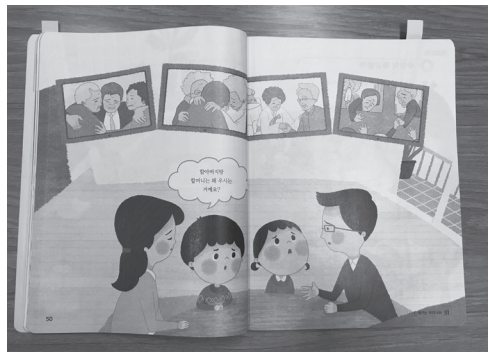
- ・「わが国の文化」「わが国の象徴」、「統一」という下位主題が、「ここはわが国」に集約できるような構成。
- ・「掲示板：わが国に関して勉強してみたいこと」では、学生自ら書き込んだメモを掲示板に貼る活動ができる。

「やってみましょう」では、「授業作り」をし、「授業をする」活動。実際に学生と教師が統合教科書を参考にして、授業を作っていく（再構成する）構成だ。ここでは、「関係作り」、「考えを分かち合う」（話し合う・議論する）、「観察する」、「表現する」能力を涵養する。

ここからは、『冬1-2』の「国」（上位主題）における「わが国」（下位主題）の「統一」という内容について取り上げていく。

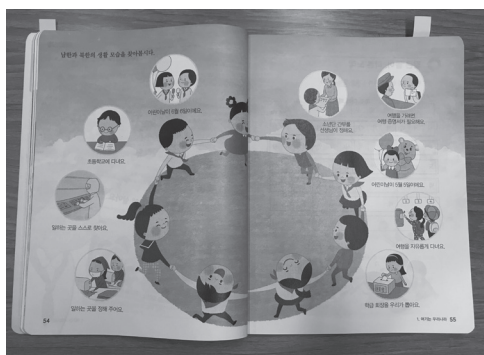


【写真6：左】「授業作り：やってみしたい活動を決めて、やってみましょう。」
48～49頁。



【写真7：右】「おじいちゃんとおばあちゃんは、なぜ泣いているのですか。」
50～51頁。

統合教科書の「授業作り」（左の写真）には空欄があり、該当授業の主題を各クラスの教師と学生で決めることができる。実際、教科書に掲載されている写真からは、韓国と北朝鮮に離れて住む「離散家族」が何十年ぶりに再会する様子がわかり、各クラスで朝鮮半島における「統一」問題について話し合う活動を促している（全体の「授業作り」の計画が立てられる。正しい生活1時間）。

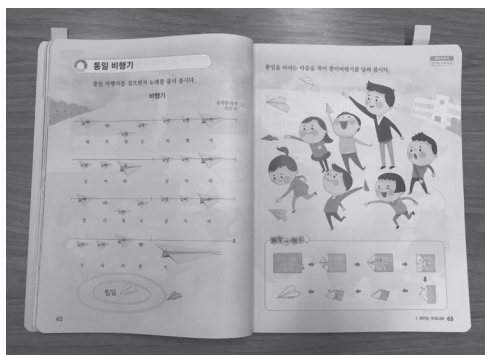


【写真8：左】「何が同じなのか。」：「南北韓学生の一日の生活をみてみましょう。」
52～53頁。

【写真9：右】「韓国と北朝鮮の生活（姿）を探してみましょう。」54～55頁。

左の写真「何が同じなのか。」では、韓国と北朝鮮の学生の一日（生活）を比べてみる内容である。韓国の世宗（セゾン）市に住むミナは、「学校に行く準備をし」→「学校で友だちと」→「共に勉強を頑張り」→「学校でお昼を食べ」→「放課後、楽器を習う」という一日を過ごす。他方、北朝鮮の開城（ケソン）市に住むユンホは、「友だちと一緒に学校に行き」→「学校で友だちと」→「共に勉強を頑張り」→「家でお昼を食べる」→「放課後、友だちと遊ぶ」という一日を過ごす。

右の写真「韓国と北朝鮮の生活（姿）を探してみましょう。」では、9枚の絵から、韓国や北朝鮮の生活に当てはまるものを探すことになっている。こちらでは、前回の授業で「統一」について話し合う計画を立てた後、韓国と北朝鮮の学生やその生活について「調査する」活動ができる（正しい生活1時間、賢い生活1時間）。



【写真10】「同じ遊び、異なる歌」56～57頁。
・「脚抜き遊びをしながら、歌を歌ってみましょう。」

ここでは、韓国と北朝鮮で昔から伝わってきた童謡と遊び（遊びの手順も絵で説明）を一緒に学ぶ。歌って、遊びながら「統一」について話し合う活動をさせる（「遊ぶ」、「考えを分かち合う」（話し合う・議論する）活動、正しい生活1時間、楽しい生活1時間）。



【写真11】「私たちは、一つの民族」58～59頁。

- ・「韓国と北朝鮮がなぜ一つの民族であるかについて話してみましょう。」

ここでは、サッカーの大会などで、世界の国々の競技に参加してきた北朝鮮の話をしなが、韓国と北朝鮮は、長い歴史や様々な文化を共にしてきた同じ民族であることを説明。最後には、小学生が父親に「他の国と北朝鮮が対戦する時は、同じ民族である北朝鮮を応援する」と話しかける絵があり、北朝鮮との「関係作

り」やそれについての「考えを分かち合う」（話し合う・議論する）活動を促している（正しい生活1時間）。

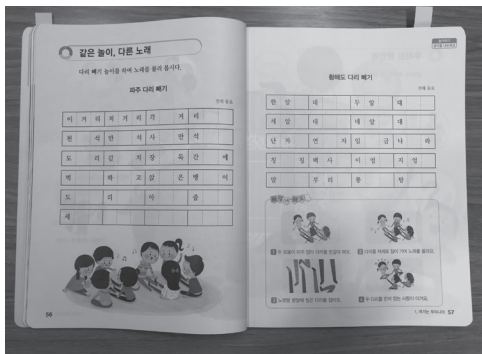


【写真12】「統一になったわが国」60～61頁。

- ・「統一になったらできることを考えてみよう。」
- ・「統一になったわが国でやってみたいことを画いてみよう。」

ここでは、「北朝鮮まで旅行もできる。」、「汽車に乗って、北朝鮮を通してヨーロッパまで行ってみようか?」、「あそこに、私たちの故郷が見えるよ。」、「わが国がもっと発展できるはず。」などの項目があり、「統一」に

なった朝鮮半島でできることを考えさせ、「表現する」、「考えを分かち合う」（話し合う・議論する）活動をさせている（正しい生活2時間、楽しい生活1時間）。



【写真13】「統一飛行機」62～63頁。

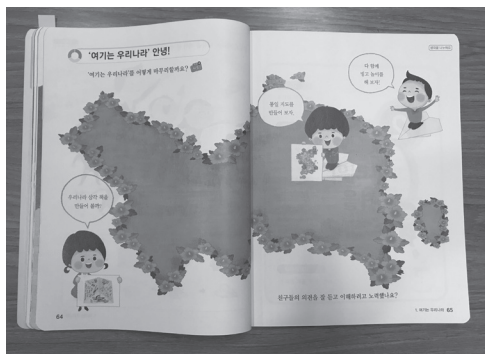
- ・「統一飛行機を織りながら、歌を歌ってみましょう。」
- ・「統一を願う気持ちを書いて、紙飛行機を飛ばしてみよう。」

ここでは、韓国の有名童謡である「飛行機」を取り上げているが、紙飛行機には、「統一」を願う学生の気持ちを書かせ（教科書の飛行機には「統一になったら白頭山に登ってみる」と書かれている）、「統一」意識を「内面化

する」、「考えを分かち合おう」（話し合う・議論する）活動をさせる（正しい生活1時間、楽しい生活1時間）。

最後の項目である「まとめましょう」では、主題学習をまとめる。ここでは、「考えを

分かち合う」（話し合う・議論する）、「自ら評価する」能力を涵養する。



【写真14】「「ここはわが国」こんにちは！」
64～65頁。

- ・「「ここはわが国」をどのようにまとめましょうか。」
- ・「友だちの意見をよく聞いて理解しようと努力しましたか？」

ここでは、「わが国の三角本を作ってみようか。」、「みんなでビンゴゲームをしてみよう！」などをして、朝鮮半島の「統一地図」を作らせており（「統一地図を作ってみよう」

65頁）、最終的には朝鮮半島における「統一」や統一意識について、「考えを分かち合おう」（話し合う・議論する）活動をさせる（正しい生活1時間、楽しい生活1時間）。

【表6】内容の構成：『冬1－2』における「国」（上位主題）の場合

領域（上位主題）		国
核心概念（下位主題）		わが国
一般化した知識		わが国には美しい伝統があり、わが国だけの特別な状況がある
内容	正しい生活	愛国
	賢い生活	・わが国の象徴と文化、・南北韓の生活と文化
	楽しい生活	・わが国の象徴表現、・南北韓の遊び、統一に対する関心表現
技能		・正しい生活： 振り返ってみる、自ら行動する、内面化する、関係作り、習慣化する・賢い生活： 観察する、グループ作り、調査する、予想する、ネットワーク作り・楽しい生活：遊び、表現する、鑑賞する

【出典】筆者作成。

以上、『冬1－2』の「上位主題」である「国」を分析したが、「上位主題」の「国」、「下位主題」の「わが国」、（朝鮮半島における南北の）「統一」に関する問題を取り上げ、学習活動をさせていることは、大きな特徴であると言える。2013年改訂教育課程の教科書『わが国』の2巻でも「わが国」や「わが国の象徴」についての言及はあったが、当時の教科書に比べて現行の統合教科書では、単純なナショナリズム教育ではなく、「統一教育」までを視野に入れた教育を展開している点は非常に興味深い。戦後韓国における「統一」教育の問題や「分断イデオロギー」教育の形成と展開については、今後の課題にしておきたい。

『冬1－2』における「国」の内容構成をまとめてみると、【表6】のようになる。

4. 『安全な生活』の誕生

『2015改訂教育課程』は、とりわけ「創意的な体験活動」（「教科（群）」の他、「創意的な体験活動」を新たに設定）を重視した「体験学習」に関する項目が目立っている。既述したように、初等学校（1～2学年の場合）では、ハングル教育を強調するなど幼児教育課程（「ヌリ課程」）との連携を強化していく上で、授業時数を週に1時間ずつ増加させたものの学生に学習負担をかけないようにするため、「創意的な体験活動」時間を活用させるとした。具体的には、一般の教科とは別に、2年間に336時間を使用し「創意的な体験活動」を行い、体験中心の『安全な生活』（64時間）という科目も新設した。『安全な生活』は、「生活安全／交通安全／身辺安全／災難安全」の4つの領域で設定されているが、初等学校の低学年から体系的な安全教育を実施させ、安全意識を内面化させるという狙いがあった。また、初等学校3年生から高等学校までの関連教科（体育、技術・家庭（実科）、科学、保健など）に、「安全」という単元を新設し、理論と実践・体験を体系的に取り上げ、これを通じて究極的に安全が生活化できるように構成するなど、教科書における「創意的な体験活動」の主な内容が『安全な生活』に焦点を合わせていることがわかる。本章では、新しく新設された『安全な生活』の特徴について検討する。



【写真15】『安全な生活』1巻・2巻¹⁶

2014年4月、「セウォル号沈没事故」などの契機で安全意識及び安全に関する基礎知識の涵養に対する社会的要求が高まった。これによって、教育部長官が主宰する学校安全及び災難関連の専門家協議会（2014年5月24日）において、安全教育を独立教科として新設する方案を明らかにし、新設に向けての議論もスタートさせた¹⁷。このようにして誕生した『安全な生活』

は、教育部が2015年12月に発表した『2015改訂教育課程』に含まれ、2017年度から学校現場で教えるようになった。初等学校1～2年生の場合、改訂教育課程に従い、一週間に授業時数1時間をこの科目を教えるのに使用している。

当初教育部は、『安全な生活』を既存の統合教科と同様に独立教科としては新設せず、「創意的な体験活動」時間を通して授業をする予定で、2015年9月4日の「2015改訂教育

¹⁶ 2017年3月1日初版発行、監修：国立国語院・語文規範、著作権者：教育部、編纂者：ソウル教育大学校・国定安全な生活教科用図書編纂委員会。

¹⁷ イ・ミスク（研究責任者）共著「Ⅲ『安全な生活』開発の方向と主要内容」『2015改訂教育課程試案開発研究Ⅱ 初等統合教科教育課程及び安全な生活』韓国教育課程評価院、2015年11月、45頁。

課程の総論（試案）」の最終公聴会においても、「別途、教科書を開発しない」¹⁸などの発言が確認できる。また、改訂教育課程に関する議論の場において、全国教職員労働組合側も「安全教育は色んな科目に分けてすでに教えており、安全教科を別途に新設する必要がない」¹⁹とも指摘したが、これらの意見は、独立教科として新設した場合、教師や学生の負担が大きくなると思ったからだという。ところが、結局のところ、『安全な生活』を独立教科として新設することになったのは、既述したように、「セウォル号沈没事故」以後、安全教育を強化すべきという指摘が多かったためである。また、相次ぐ児童虐待事件で関心が高まった家庭内暴力の問題の他、火災、地震、黄砂、PM2.5などの災難・自然現象に対する安全教育の問題も深刻に受け入れるようになったためである²⁰。

なお、「学校安全事故予防3か年基本計画」を作り、2015年2月に改訂された学校安全事項予防及び保障に関する法律から、3年ごとに学校安全事故予防に関する基本計画を作り施行させるようにした。教育部は、2015年12月現在、年平均7.8%である学校安全事故の増加率を2018年まで0%までに減らすことを目標に、初等学校3～6年生を対象とした「生存水泳」の教育拡大、科学実験開始前の「5分安全教育」、学校別に安全教育などを実施すると発表している。また、各学校では、学生の安全教育と教員研修を担当する安全部長という職責を新設し、市・道の教育庁には「学校安全管理委員会」が新設された。学校周辺の一定区域（200メートル以内）は学生安全地域と指定し、学生安全地域の交通、犯罪、食品、環境、衛生などの危険レベルを評価する指数も開発した。教師は、2017年まで15時間以上の安全教育の職務研修を受け、保健教師と体育教育は、年間4時間以上の心肺蘇生術などの応急処置教育を毎年受けることになった²¹。

【表7】『安全な生活』1巻・2巻の主な学習内容

領域	主な内容
生活安全	学校生活安全、家庭における安全、社会における安全
交通安全	信号、表示板などの歩行者安全、自転車・車の安全
身辺安全	誘拐、迷子事故予防、学校内暴力、性暴力、家庭内暴力
災難安全	火災、地震、黄砂、PM2.5、台風などの災難、災害

【出典】教育部『安全な生活』教育課程を参考に筆者が作成。

¹⁸ ジョン・ウォンシク「教育部、教科書はないと言っていた『安全な生活』の教科書、開発する」『ギャンヒャン新聞』2015年12月30日付。

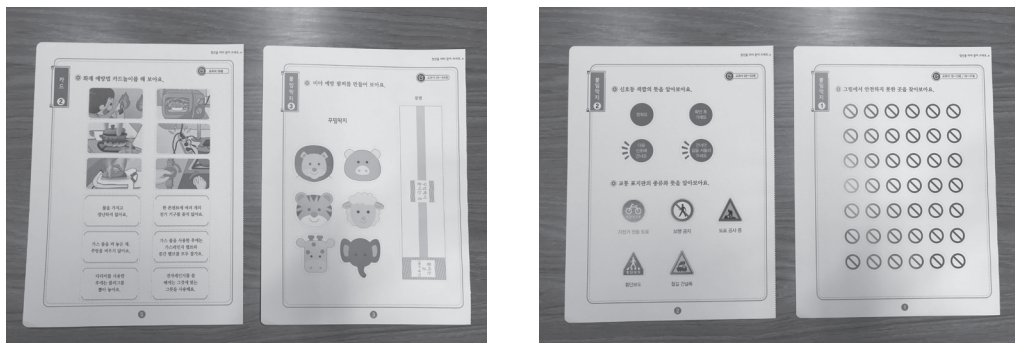
¹⁹ 前掲新聞、『ギャンヒャン新聞』2015年12月30日付。

²⁰ イ・ユンヨン「来年、初等1～2年生から「4代安全教育」大幅に強化」『連合ニュース』2016年8月28日付。

²¹ 前掲新聞、『ギャンヒャン新聞』2015年12月30日付。

『安全な生活』は、「体験活動」時間を活用して1年生は28時間、2年生は30時間で設定されており、学校では学年群（1～2年生）において合計64以上の授業を編成しないといけない（大体1週間に1時間の授業をする程度）。また、初等学校の3年生から高等学校までの関連科目（体育、技術・家庭（実科）、科学、保健など）に、「安全」という単元を新設し、理論と実践・体験を体系的に取り上げ、これを通じて安全が生活化できるように構成した。

【表7】は、『安全な生活』の主な学習内容である。『安全な生活』は、「生活安全」、「交通安全」、「身辺安全」、「災難安全」という領域で構成されており、「自己管理能力」、「共同体意識」、「知識情報処理能力」を涵養する内容を選定している。こうした能力と共に、「危険を識別する」、「予防する」、「危険な状況から脱出する」、「危険な状況を知らせる」などの技能を身につけることに重点を置いている。



【写真16：左】『安全な生活1』「火災予防カード遊びをしてみよう」76頁（教科書の該当内容）、5頁（活動資料）。「迷子予防のシールとブレスレットを作ろう」58～59頁（教科書の該当内容）、3頁（活動資料）。

【写真17：右】『安全な生活1』「信号の色の意味を調べてみよう」32～33頁（教科書の該当内容）、2頁（活動資料）。「絵の中で安全ではない場所を探してみよう」12～13頁（教科書の該当内容）、16～17頁（教科書の該当内容）、1ページ（活動資料）。

また、『安全な生活』1と2の最後には、「安全な生活のために」、「わが地域にある安全体験施設を訪ね」という体験活動をする単元がある。「活動資料」としてカードやシール（安全お知らせシール）が付録として付加されており、学生が積極的に安全教育を楽しめるような工夫もしている。また、「家族とともに」というコーナを設け、保護者とともに日常生活の中で安全生活を身につけることにした。

5. おわりに

本稿では、韓国の『2015改訂教育課程』に基づき開発された初等学校1～2年生用の新しい統合教科書と『安全な生活』を検討した。

統合教科書の特徴は、以下の3点にまとめられる。1. 新しい統合教科書は、主題別の

教科書として開発された。2. 統合学習用の学習資料（教材）として、様々な体験活動ができる教材である。3. 学生と教師が「作っていく」教科書である。とりわけ、「作っていく」教科書という特徴は、統合教科書のもっとも重要なポイントでもある。既存の教育課程では、到達基準に適切な内容及び活動を指定していたが、改訂教育課程では、到達基準だけを提示することにした。これにより、教師は学習主体と到達基準を考慮し、クラスや学生に合った内容や活動、方法などを設定できるようにした。

統合教科書『冬1-2』の中でも、「上位主題」である「国」や「下位主題」の「わが国」、（朝鮮半島における南北の）「統一」に関する項目を取り上げたが、ここでは、全体を通して「体験活動」学習をさせていることがわかった。また、『2009改訂教育課』の教科書に比べ『2015改訂教育改訂』の統合教科書の方が、単純なナショナリズム教育ではなく、「統一教育」まで視野に入れた教育を展開している点は、まさに新しい統合教科書の特徴であると言える。

『安全な生活』は、初等学生の1～2年生が生活における危険要素を把握し危険を予防しながら、危険状況に直面した時に落ち着いて対処できる能力を身につけるため開発された教科書である。『2015改訂教育課程』では、一般の教科とは別に、2年間に336時間を使用し「創意的な体験学習」を行うが、体験中心の『安全な生活』の教育には64時間を使用する。『安全な生活』は、「生活安全／交通安全／身辺安全／災難安全」の4つの領域で設定され、初等学校の低学年から体系的な安全教育を実施させ、安全意識を内面化させるという狙いがみられた。

以上、韓国の初等学校における『2015改訂教育課程』や統合教科書、『安全な生活』について検討した。しがしながら、『2015改訂教育課程』において、教科（群）とは別に設定されている「創意的な体験活動」を支えると期待されているものが、学校教育の外側にある「体験活動」関連施設で行われている教育プログラムや副教材による学習であることは看過できない。これらの教育プログラムや副教材は、学校教育以上に生活に根付いた感じで、学生その他、家族（保護者）向けのプログラムなども充実しており、多様なグループにも対応できる戦略的な構成となっていることを注目すべきである。本稿では、紙面上の都合で記念施設における体験学習や教育プログラム・副教材について取り上げることができなかったが、これらの問題については今後の課題としたい。

〔付記〕

本研究は、日本比較教育学会第53回全国大会（2017年6月25日、於・東京大学）にて、「韓国初等教育における体験学習の諸問題」というタイトルで行なった個人発表の一部であり、科学研究費・基盤研究（C）「戦後韓国における「分断イデオロギー」教育の形成と展開—教科書・体験学習を中心に—」（課題番号：17K04725、平成29～32年度）の研究成果の一部である。